

第4章

一九九〇年選挙とフジモリ現象

## 1 バルガス・リヨサの失速

### 政治不信の高まり

一九九〇年選挙は、ガルシア政権の失政と国際孤立を受けて、経済再建間にコンセンサスがあったわけではない。むしろ有力候補のリヨサが早々と政権準備を整え、自由開放経済による再建案を発表したため国論は二分されていた。フレデモ（民主戦線）の構想をいかに否定するか、一次選挙でフレデモに過半数を与えずいかに二位に食い込むかに各勢力は精力を集中した。魅力ある代替案の提起ではなく否定することに集中したが、他の候補者の支持を低める遠因となり、フジモリの隙入る余地を生んだといえる。

有権者には十年間の民政の失敗のあと、どの勢力に政権を託したらよいのかという戸惑いと不安があった。とくにガルシア政権には熱狂的支持を与えただけにその幻滅感も深かった。党派的利益を追求するあまり危機に対処できず、国の破綻をまねいた政治勢力と政治家に対し、国民の不信感が高まっていた。言葉で国民を巧みに誘導し、就任後は腐敗と利権獲得に腐心するこれまでの政治家をもはや信用できなかつた。国民は斬新な政治と信頼できる新しい政治家

を待望していたのである。

この点で一九八九年十一月、前哨戦といわれた統一地方選挙で実に印象的な事態が起きていた。リマ市長選での「ベルモン現象」である。自らの頭文字をとった大衆向けラジオ局RBCの人気キャスター兼オーナーのリカルド・ベルモンが、有力候補者を尻目に四〇%以上の支持率で当選したのである。具体的政策を発表せず、言葉は不要、仕事を重視する市政の実現を訴え、「オブラス」(事業)という運動を率いての勝利だった。伝統的政治家に対するアマチュアの勝利である。有権者の政治不信という条件がなければ、フジモリは善戦した日系人候補者として、選挙戦を飾るひとつのエピソードにすぎなかったことであろう。

与党アプラ党は、経済大臣から下院議長、党書記長となったアルバ・カストロを候補に推したが、カリスマ性もなく政権とのつながりからして可能性はなかった。組織票(二〇%)はともかく、ガルシアが一九八五年に積み上げた二五%の浮動票の獲得を期待できるすべはなかった。二位に入ることすら絶望視されていたが、ガルシアは、選挙に向け財政発動による経済活性化や雇用政策を展開し、浮動票のとりまとめに腐心していた。

左翼勢力はどうだったか。一九八〇年代、統一左翼連合(IU)のもとで第二勢力の地位を不動のものとしており、左翼が衰退するポスト軍政の南米諸国のなかで、政権到達の可能性を秘めた最大の勢力に成長していた。とくに人民行動党がつまづき、アプラ党が破綻したとき、



左翼連合のキャンペーン。演説するバランテスと指導者たち(CARETAS誌提供)

選択肢として左翼が浮上したのは当然だった。なかでも無党派ながら連合議長のバランテス・リマ市長は、カハマルカ出身の混血政治家として浮動層を動員できる能力をもっていた。九〇年に社会主義政権が誕生し、チリのアジェンデ人民連合政府が七三年に倒れたように、九二年に軍事クーデターで倒れることを想定した政治小説まで出版されたほどだったのである。

左翼の凋落の原因は、まずガルシア政権の国家主義的経済の破綻をあげなくてはならない。ガルシアは任期前半、米系のペルコ石油の国有化（一九八六年）や中米政策など、反米民族主義に立った左翼寄りの政策で支持を得ようとし、他方バランテスも政権の民衆寄りの政策を支持してきた。つまりガルシアの失敗は左翼の政策の失敗ともみられたのである。またソ連東欧の社会主義圏をめぐる環境は、明らか

に逆風であった。しかも左翼勢力は硬直した古いイデオロギーにとらわれ、指導層も固定化し既得権益化していた。負の局面にあって、思想的組織的に刷新する力はなく、政府・大企業の労組への依存体質から脱却できず、増大したインフォーマル部門の要求をくみ取る力もなかったのである。

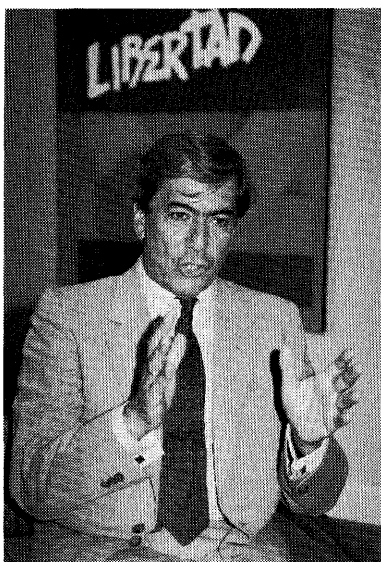
左翼の可能性の芽を完全に摘んだのは内部分裂だった。七政党を糾合した連合内部には、ベラスコ派の流れをくむPSR（社会主義革命党）など社民系の穏健派と、最終的には武装闘争も辞さないPUM（統一マリアテキスタ党）に代表される急進派、労働総同盟を傘下にする共産党統一派（PCPU）を軸とする中間派とに大別されていた。ガルシアとの関係を重視するバランスを批判していた急進派は、一九八七年五月、労働総同盟系のゼネスト決定を前に、バランスが政府との話し合いを主張したことで態度を硬化させ、五月末バランスは議長を辞任した。大衆の動員力を信じたバランスは、内外状況の変化のなかで勝機をつかむため、急進派と袂を分かち、スペインの社会労働党政権のような民主的イメージを確立することで、軍部や経済界の支持を得ようと画策した。しかしその戦略は急進派から分派主義として指弾され、中間派の支持も得ることができず、結局穏健派とともに分離し社会主義左翼（IS）を結成して立候補したのである。連合からは、カトリック系左翼知識人の代表でバランス市長の右腕であったヘンリー・ピースが擁立された。イデオロギー対立とともに、個人的利害や嫉妬

が左翼勢力のなかに影を落としていた。

左翼は統一してこそ力となることを学んできたはずであった。一九八〇年の大統領選挙で一候補を立てられず、憲法制定議会で三分の一を誇った勢力を後退させたからである。その教訓から八〇年の地方選で統一を果たし、押しも押されぬ勢力として台頭したのである。選挙を前に内部対立と分裂を繰り返す姿は、左翼のイメージを大きく損ね、左翼への投票は失われる票とみなされた。八九年前半までリヨサと競っていたバランテスの支持率は、連合の候補者選びが混迷し分裂が明らかとなる後半以降一〇%前後に急落し、リヨサに大きく水を開けられるにいたったのである。

### バルガス・リヨサ の可能性と失速

自由市場化という国際的潮流も追い風となり、国際知名度をもつリヨサが、こうして早々と支持率を突出させ、選挙一年前に四〇%に、半年前には四五%以上を維持したのである。リヨサは国有化反対運動でみせた政治力を背景に、既存の政治勢力を批判した。特にアプラと左翼に対する批判は鋭く、ベラスコからガルシアにいたる民族主義と国家主義が国を破綻させ、低開発の元凶であると非難した。党派に縛られない斬新なイメージ、名声にもかかわらずあえて汚れ役を担い、国家の窮状を救おうとする真摯なイメージが武器だった。国際的知名度の高さは、国際支援が不可欠な段階にあって、最高の候補者と考えられた。焦点は、一次選で過半数を突破できるか、さもなければ徹



バルガス・リヨサ(読売新聞社提供)

底した自由主義的経済再建策が影響を受けかねないこと、一次選に誰がどのくらいの票差で二位につけるか、それしだいでは二次決選での展開は不透明になるだろうという点であった。

しかしリヨサは、政治基盤を固め勝利を確実にするため早い段階から保守政党に接近した。一九八八年の正月、北部海岸の保養地プンタサルで、人民行動党総裁のベラウンデ、キリスト教人民党の総裁ベドヤと会談し、二大保守政党と民主戦線(フレデモ)を結成した。翌年四月

には政策綱領に調印し正式にフレデモが発足、六月には大統領候補にリヨサが擁立された。政策綱領には、自由と民主主義、市場経済を基礎とする新しい近代化の道が明示された。

保守二党との連携をリヨサは、自らの候補辞退をちらつかせつつ、終始リードしていった。近代主義に立脚する作家として、個人的イメージだけで立候補することは考えられず、両政党の組織力が頼りだった。リヨサの保守党

との人脈や思想的近さがそれに拍車をかけた。一九八〇年の民政移管に際しリヨサは、エルナンド・デソトとともに、ハイエク、フリードマンら自由主義の論客を招いて国際フォーラムを開催し、第二次ベラウンデ政権発足の後押しをしている。デソトはのちに自由民主協会（ILD）を設立し、『もう一つのセンデロ（道）』を著す。副題を「インフォーマル革命」と銘うつた同書は、八〇年代後半のラテンアメリカにおける国家主義批判と自由主義のバイブルとなる。リヨサは、保守勢力の力を盛り返したという自負から既存政党をリードできると踏んでいたであろうが、個人的野心もあったデソトは、保守政党のなかに重商主義の残滓を見、リヨサと袂を分かった。リヨサは、『もう一つのセンデロ』の「まえがき」でインフォーマル部門に資本主義発展の活力を見出し、民衆資本主義の重要性を訴え、キャンペーンでは二〇〇〇万の資産家の国にしたいと主張していた。しかし自由運動には、経団連（CONFIEP）の歴代会長が顔をそろえるなど、完全にエスタブリッシュメントに依拠していた。それは選挙は金がかかるものという意識の表れで、議員候補者リストにもそうした配慮が滲みでていた。伝統的な権益を打ち崩そうとしたリヨサは、その手法において権益集団を動員していたのである。

それでも選挙三カ月前まではリヨサのイメージが勝っており、フレデモ圧倒的優勢の状況に変わりはなかった。それが二カ月前に入ると四〇％に下降し、「支持は天井に達した」といわれた。急落の原因は何か。逆説的だが選挙の一年も前から優勢を誇った高い支持率にあったと



いってよいだろう。自信過剰からくる白人的傲慢さともいうべきものであり、政権が転がりこんでくるものと見越した肩で風きる行動がリヨサ陣営には目についた。これが農村から出てきたチヨロたち都市民衆層に疎まられたことは疑いない。次に二月以降本格化した国会議員選挙の影響である。比例代表制であるが名簿非拘束のため、資金力にものをいわせたフレデモ系候補者は個々にテレビ広告を買い占め、統制のとれない宣伝合戦を行なった。それまで国際的作家の個人的イメージに包まれていたフレデモの影から、ベラウンデ時代に批判された政治家の顔がぞろぞろと現れたのである。

さらにリヨサの齒に衣着せぬ率直さである。選挙戦が泥沼の様相を帯びる段階になると、いわれない中傷が浴びせられたが、確立した名声ゆえにそのプライドを傷つけられると後先の影響を考えず反撃した。またリヨサの西欧近代崇拜はつとに知られたところであるが、ペルーが発展するためにはヨーロッパのようにならなければならぬ、伝統的な土着文化は消滅する以外にないと主張してきた。こうした知識人としての考えは、候補者リヨサの言葉の端々に現れ、白人支配者の伝統を引き継ぐ傲慢さと映る。さらに政治家としてのリヨサの演説は、知識人の常として、説教的で難解、また政治演説に不可欠な陳腐や美辞麗句を嫌い、暖かみに欠け、民衆の心の琴線には響かないものだった。

政策についても率直だった。国民に嘘をつく政治を改めるべきだと主張した。明確な政策を

提示し、有権者がそれを承知でマンデート（絶対過半数）を与えてくれることが必要と考え、敢えて理想を言った。一九九〇年十二月、経営者年次総会（C A D E）で発表したフレデモの行動計画は明快だった。ハイパーインフレを撃退し一年後に年率一〇%とするため、厳しい価格調整、経済の自由化、貿易の自由化、公社八〇企業の即時民営化、労働安定・義務教育の見直しを行なうというもので、一、二年は不況で大きな犠牲が出て悲惨となるうが、その後は離陸するだろう、その間、内外の援助で貧者救済のための社会支援計画（P A S）を行なうと宣言したのである。

この政策は危機打開の「ショック療法」と呼ばれ、格好の攻撃材料となった。与党アプラ党は、これを死にいたる民衆の姿とダブらせる悪意のテレビキャンペーンを流した。主要政党が反「ショック療法」、反フレデモに収斂し、選挙戦は分極化した。それは治安情勢の悪化のなかで、政権交替を機に融和を求めるときとする国民感情を逆撫でした。だがリヨサは、国を破綻に導いた勢力とは、協調は不可能として拒否したのである。こうして有権者のフレデモ離れは進んでいく。破綻したアプラでも、分裂した左翼でもなく、さらに伝統的勢力に囲まれアプラを押しつけるフレデモでもない、それ以外の選択肢を有権者は模索しはじめた。いわば消去法によって、主要候補が支持を失っていったのである。

## 2 フジモリ現象

### タブーと伝統支配 への挑戦

フジモリの選挙戦はペルー政治にまつわる伝統的枠組みをくつがえすものであり、そこに彼の勝機も芽生えたといえる。政治の流れを読む透徹した力と運の強さが働いていた。タブーに敢えて挑戦したその着想と腹を据えた態度は見事というしかない。日系人というマイノリティ集団の出身であり、またペルーを世界に代表する有名人が最有力候補であったことからして、当選するには伝統的白人層を相手にしなくてはならない。副大統領候補には、零細企業のまとめ役、中小企業連盟の会長でクスコ出身のチョロで実業家サン・ロマンを据えたが、これは大企業を相手に戦うことになる。また第二副大統領候補には、プロテスタント系諸会派をまとめていた黒人系のガルシアを据えた。これは九五%がカトリック教徒といわれる国で、敢えてカトリック教会と戦うことを意味していた。

大胆な構想が奏功すると最初から計算していたかは疑問である。むしろフジモリは、消去法、反フレデモ感情の噴出という、いわばボタンの掛け違いともいえるべき歴史の女神のいたずらに

勝機を見出し、その流れを一身に誘導したのである。重要なのはその流れが大きくなるとき、ペルー社会の根底で起きていた地殻変動の波を的確に引き寄せるだけの能力と装置を備えていたということだろう。その意味で、歴史と社会が候補者を探り当てたといったほうが適切かもしれない。変動期には、それにふさわしい人物が登場するものだ。民衆の支持がまさに津波のごとく高まってくることに最も驚いたのは、フジモリ本人だった。

フジモリは、投票半年前の大統領への立候補に続き、三カ月前の上院議員への立候補を行なっている。歴代の大統領候補で上院議員にも立候補した例はない。むしろ副大統領候補が上院議員の比例代表リストの筆頭に名を連ねるのが普通であった。大統領候補者のプライドがそうさせるのである。フジモリは大統領に立候補することで、知名度を浸透させ上院議員のいすをねらったと考えるのが自然である。しかし憲法で禁止していない併立を思いつかなければ、間違いなく将来の日系人大統領は誕生しなかつただろう。

一次選を前に、フジモリは主たる公約発表の場に招待されないマイナーな候補者であった。フジモリの戦術はフレデモと比べればまったく対照的だった。現状打開と一九九〇年選挙を併せて、立候補の母体を「変革九〇」(カンピオ九〇)と単純化した。党派やイデオロギー色のない改革勢力ということで、公約も単純だった。八〇年代国政を担当し危機に陥れたと主要政党を批判し、フレデモについては、伝統勢力が異なった名前でも政権に返り咲こうとしていると攻



選挙の前年、在リマ日本大使公邸を訪れたフジモリ夫妻

撃した。腐敗に代わる「誠実」さ、政治に代わる「技術」、「勤労」に支えられた発展がすべてだった。「技術」はフジモリが学長を務めていた農科大学の技術、「勤労」はサン・ロマンに代表される零細企業にみられる民間の企業発意、「誠実」は、カルロス・ガルシアが代表するプロテスタントのそれだった。既存の制度の枠のなかでは日の当たらない部分であったが、それぞれが具体的な勢力に代表されていた。

プロテスタント勢力は少数派だが、強い意識に支えられ行動する信者を擁し、世俗・形骸化するカトリック教会に不満をもつ人々の間に信徒を増やしつつある。これはペルーのみならずラテンアメリカ全体に共通する傾向だが、一九九〇年選挙では誠実さと勤労によ

って現状打破をめざす改革勢力として具体的に政治への関与を強めていった。カンビオ九〇は、国会議員候補者リストの約半数にプロテスタント系信者や宗門代表者の名前を連ね、集会、プロテスタント系のラジオ放送、個別訪問を通じて「わが兄弟に投票を」と呼びかけて支持を集めた。信者を通じて草の根的な支持が静かに広がったのである。

また大統領候補フジモリの顔は、国営七チャンネルの政治討論番組「コンセルタンド」(協調して)のキャスターとして、少なからず知られていた。そのときどきのテーマについて専門家を呼んで意見を戦わせ取りまとめる番組は、国の問題点を知悉せしめ、政治家フジモリの力量を高めていったことは疑いない。とくに国営放送の電波にのって、地方にその番組が与えた影響は少なくなかった。こうしたフレデモとは対照的な静かなどぶ板的とも呼べるようなキャンペーンが下地としてなければ、いわゆる「フジモリ現象」はなかったであろう。

「フジモリ現象」の引き金になったのは疑いなくマスメディアの力だった。

### マスメディアと 日本ファクター

フジモリの名が世論調査に現れたのはCPI社の投票二週間前の四・八%、五位というのが公式では最初で最後のものである。二週間前に世論調査の公表が禁止されており、各調査機関はいずれも最終結果を発表したが、唯一CPI社だけがフジモリを主要四候補に続く一角に位置づけた。その後も調査は行なわれ、その結果が漏れ伝わったが、公式発表が禁止されているがゆえにむしろ噂が先行する異常な雰囲気が高まっていた。

た。

第五位に頭角を現して以来、フジモリの存在に気づいたマスコミは競ってスポットを当てた。実質一年以上にわたる選挙戦に疲れ、分極化し対立的様相を深める選挙戦に嫌気がさすなかで、話題をさらう格好の存在となったのである。だがこの時点で、まさか日系候補者が津波現象を起すなどとは誰も考えなかった。ただ民族的要素をもつ物珍しさへの興味本位の反応にすぎなかったといえる。また資金が乏しくテレビを利用できなかったフジモリは、顔売り支持を広げるためには、何でも利用した。しかも分極化する選挙選の片方に与することによるイメージダウンを避けつつ、中道で変革勢力としてのイメージを膨らませたのである。マスコミは、日系人としての出身や背景、家族、習慣、家庭生活を競って報じた。フジモリもマスコミの要望に沿ったパフォーマンスを進んで演じた。浴衣を着て日本刀を振りかざし、空手を演じた。家庭で家族と日本食をとる場面が報道された。フジモリはこの時、明らかに日本と日本文化を売り物にしていた。

フジモリは一気にマスコミの寵児となり、カンビオ九〇の単純なスローガンが電波にのって伝えられていった。同時に、戦後日本が国民の勤勉さで廃墟から驚異的復興を遂げ米国と貿易摩擦を起こす経済大国にまで発展したことが、日系人に対する評価とともに紹介され、フジモリ自身、またその支持者が、当選すれば日本からの援助が増えることを陰に陽に示唆した。一

Nº 161 Precio 25.000 irris

Lima, semana del 26 de marzo al 2 de abril de 1990

Foto: ROCCO CACERES

# SI

## VILLAGRO PONES

Samurai  
FUJIMORI  
se lanza al  
ataque

Tecnología  
nivel sorprende  
con tercer puesto  
en Lima

### ULTIMAS ENCUESTAS

浴衣・日本刀の姿で雑誌の表紙を飾るフジモリ  
(SI誌、1990年3月26日～4月2日)



九〇年の初めアポヨ社の世論調査で、日本は米国と並び好印象をもつトップの国となっていた。その前年は日本人移住九〇周年に当たり、ペルー援助の実績や日系社会の活躍ぶりが大きく報道されていた。併せて行なわれた日本の無償援助は、困難極まるガルシア政権末期の情勢下だけに歓迎され、『エル・コメルシオ』の社説を飾った。また政府は日本や日系人のペルー貢献を讃え、九十年前（一八九九年）第一回契約移民船佐倉丸がカヤオに入港した四月三日を「ペルー日本友好の日」と定め、それを毎年祝う大統領令を發布している。さらに記念行事に出席予定の日本ペルー議連の会長の海部俊樹が首相に就任するハプニングがあり、それがまた両国の重要性和将来の関係を示唆するものと高く評価されたのである。リョサが国際的に著名であることが国際支援を受ける条件を備えていたとすれば、フジモリは日系二世であることによつて、日本からの支援と結びつけられた。

また苦勞した移民の子で教育だけで大学学長にまでなったフジモリに、地方農村出身者やその子供たちは、自分やその子供たちの将来を重ね合わせていた。教育の機会を子供に与えることで差別を克服し、社会的上昇を夢見て都会に出て、勤勉さだけをかてに生活を切り開いてきた国内移民である彼らにとつて、フジモリは親しみやすいチニート（チノは中国人の意、転じて東洋系一般をさす）であり、フジモリの周りにいるのも自分たちと同じ地方出身のチョロとして受け入れられていくのである。こうして、フジモリ支持は浸透しはじめてゆく。市場で、都

市と地方を結ぶバスのなかで、タクシーで、行商人や乗客が口から口へと伝えてゆく。誰となくフジモリ、フジモリと囁いていた。フジモリ現象は刻々肌で感じられる熱病のように広がり、それを背に行く先々でフジモリは人を集めていったのである。四月八日の選挙直前には、二位は確定的となっていた。

投票日当日、筆者夫妻は郊外の某大手新聞社の政治部長宅に招かれ、昼食をとりながら投票の終わるのを見守っていた。招待者はフレデモ系のそうそうたる政治家たちばかりだった。目の前にプールの広がるテラスに二台のテレビが据えられ、刻々情報が伝えられていた。彼らは余裕をもって見入っていたが、投票が終わり各局が一斉に推定得票率を流しはじめ、リヨサが三〇%を割り、二位のフジモリが接近していることが判明すると、招待者のなかには顔色が変わり動揺の色を隠せない者があつた。ある者は筆者に「おめでとう」と言い、ある若い女性指導者は出席者全員に聞こえるように、「結果がどうなろうとわれわれは日本の友人だ」と言い放ち、みんなそそくさと部長宅を後にしていったのである。

### 3 「汚い戦争」

#### 緊張感に満ちた二次選

実際、投票の結果は驚くべきものだった。リヨサは二七・六%と支持を下げ、フジモリは三%差の僅差に迫ったのである。フジモリの二五%弱の票は、フレデモと左翼の周辺にあった票が流れたものと考えられる。左翼は合わせて十一%にしかならなかった。フジモリは、リマ、アレキパといった大都市とワンカベリカ、アヤクチョなど最貧困県で票を集めたのであり、一九八三年以降、左翼、アプラに流れてきた民衆票が一挙にシフトしたといえることができる。

この段階で決選投票でのフジモリの勝利はほぼ決していた。選挙戦がフレデモと反フレデモに分極化し、二位をアプラでも左翼でもない第三の候補者が占めたからだ。アプラが二位の場合、はたして左翼がアプラ支持でまとまるとは考えにくかった。予想外の候補者の登場は、権担当能力などの点で不確定要素を投げかけてはいたが、何よりも民衆層の支持が圧倒的だったことが両勢力の支持をまとめやすくした。二次選挙でフジモリは五六・五三%と、アプラ、左翼の票を一身に集め、大差でリヨサ(三三・九二%)を破って当選した。

論理的にフジモリの勝利が堅かったとしても、二次選は厳しく緊張したものだ。一次選では主要候補の影に隠れ、予想外の展開で他陣営からまともな批判を受けずにすんだ。だが二次選では、選挙前に組み立てた日系、インフォーマル、プロテスタントという構成要素が、伝統的支配層の側からまともな攻撃にさらされることを意味していたからである。統帥権にかかわる問題が真直に迫るにつれて、軍の支持がはたしてとりつけられるだろうかといった緊要な課題もあつた。それだけに二次選は「汚い戦争」と呼ばれ、「フジモリ降ろし」に集中するフレデモ側の絶望的な戦いが繰り広げられた。二次選は民族、階級、宗教などペルー社会がかかえる基本対立要素すべてが現実の下にさらけ出された。

リヨサは、選挙の結果が絶対過半数にほど遠かつたことに深いショックをおぼえた。現状変革をかかげる二つの勢力が勝利したこと、二次選での不毛な対立を避けたいとの理由から、出馬辞退を心に決め、秘密会談で、フレデモの人材、チームすべてを提供することをフジモリに申し出ている。しかしフジモリは、選挙で明白な正当性を得なければ大統領になつてもおほつかないと要請を断り、潔く決着をつけることをリヨサに求めた。フレデモ系幹部も辞退しないよう必死に説得を続けたが、作家の長男アルバロの回想によれば、リヨサの心を動かしたのは、密かに自宅を訪ねたりマ大司教バルガス・アルサモラの説得だったという。たしかに望んだようなマンデートが得られなかつたといつて二次選を辞退することは、立憲秩序のうえからも、

一位の候補者に許されるべき態度ではなかった。彼は敢えて恥をしのんで二次選への絶望的な戦いに挑んだのである。

### 反日的空気

一次選直後、海を見下ろすバラコンの白壁の家の前を支持者たちが埋め、傷心のリヨサを讃えたが、そのなかに「日本人は日本に帰れ」と叫ぶ声が聞こえた。支持者たちの熱狂に応えるためにバルコニーに現れたリヨサは、日系人がペルーの発展に貢献してきたことを述べ、ペルーが民族的に寛容な国であると、支持者たちの「人種主義」を戒める演説を行なった。だが熱狂的なミラフロレスのリヨサの信奉者の心を鎮めはしなかった。むしろ彼の使った「人種主義」という言葉が、この時から一人歩きをはじめた。一次選のショックが、すい星のごとく現れた日系の候補者に対する感情的反発となって現れたのである。それは混血の民衆層を動員したことへの危機感の現れでもあった。一次選直後、グラウ通りのカンピオ九〇の事務所には、地方出身の民衆たちが長蛇の列をなし我先に登録しようとしていた。まさに「投票箱の革命」が日系人候補者の手により進行していたのだ。

「三五歳以上の出生ペルー人」と規定する憲法にそっていた以上、フジモリの立候補に問題はなかったが、たしかにフジモリが日本人ではないかという疑念がいつまでもついて回った。自由運動の幹部には、フジモリが日本人の両親から生まれた「一世」であるとして、大統領になる資格を公然と疑う者がいた。現に立候補に対する意義申し立てが行なわれたこともあった

が、前年の暮れまでに全国選挙管理委員会によってその合法性が確認され、すべては解決済みであった。理性でわかっても感情では許せないものがあつたということである。表層では隠されていた民族差別的感情が一举に噴出したといつてもよかつた。国際的に一級の作家でノーベル文学賞候補、資金と年月をかけて、外遊までして各国の首脳と会い、新政権誕生後の国際支援の取り付けを行なつてきた完璧とみえた贅沢な候補者が、まったく準備も人材もなく、素人でそれも目のつり上がった日系の移民の子である候補者に迫られ、大統領の座自体が危うくされてゐることは、許しがたいことだつた。民族ルーツがないことを理由に二次選辞退を勧告するものから、せめて上院議員で我慢をし、五年間ペルー政治を学んで大統領に再度立つべしとする意見、さらには脅迫めいたものまでさまざまな形で嫌がらせが行なわれた。とくにフジモリ陣営が日本との関係を売り物にし、日本の支援をほのめかしていたことも、フレデモ側の反発をかつた。日本大使館は、どちらの候補が当選してもペルー支援は続けることに変わらないとの中立的立場を貫いたが、その立場はそれぞれの陣営によって好き勝手に解釈された。

また反日的空気は、日系人協会を中心とする日系社会全体に半世紀前の悪夢を想い出させ、過剰反応を起こさせた。ペルーの日系社会は一九四〇年大規模な排日暴動に遭遇し、そのショックから立ち直れないまま第二次大戦の開戦直後、米国の対枢軸戦線に組み込まれたペルー政府の手により、有力者約一七〇〇人が米国の收容所に強制的に送られるという、南米の日系社

会で最も悲惨な経験をしていた。それだけに戦後は、目立たないことを心がけ、常に強いものの側に立ち支配層と協力することでその地位を築いてきたからである。

日系社会は選挙を前にフジモリの大統領候補としての届出のために、乞われれば厭わず署名をしていたが、いずれも大統領になるとは夢想だにせず気楽にサインをした。本番の選挙ではフレデモを支持することが大方の傾向であっただけに、対応に苦慮することになったわけである。日系人の大統領が誕生することは、日系人がそれだけ評価されたことを意味しており、本来慶賀とすべき出来事だった。しかし、未曾有の危機のなかでだれが大統領になっても事態の好転は期待できず、むしろ失敗すればその反動は日系人社会に向けられ戦前の二の舞となるとする意見や、そもそも準備の整った白人著名候補者を敵に回すべきではないとする意見があった。結局、協会は、選挙には中立を保つことを宣言し、日系社会にはフレデモ側をいたずらに刺激しないよう行動を慎むべしとする異例の勧告を行なったのである。

### 宗教戦争と軍の批判

次の争点はカトリックとプロテスタントの宗教戦争だった。カトリック教会は、教会を意図的に中傷し宗教を政治に利用しているとして、プロテスタント勢力に攻撃の刃を向けた。たしかにアレキパなど南部では、カトリック教会を批判し、フジモリを支持する文書が流れていた。リヨサの周りにはカトリック保守派の支持があったこともそれに拍車をかけた。フジモリ政権になると、公教育にプロテスタント教育が持

ち込まれると警戒された。フジモリ自身、またスサナ夫人がカトリック教徒ではないのはいかど噂された。しかしリヨサは信念において神の存在を肯定し得ない不可知論者であったから、もつとたちが悪かつたはずだが。

ペルーの十月は、闘牛が始まり、ハカランダの花が咲く「紫の月」と呼ばれる。長いどんよりとした冬から春の訪れを告げる希望に満ちた月である。この月に民衆信仰の拠り所である「奇跡の主」(セニョール・デロス・ミラグロス)の御神体が、毎年市中を引き回される。教会はこの神体を、亀裂のみえたペルー社会の融和を名目に、選挙戦のさなかの異例の五月に引き出して街路をねったのである。明らかに宗教行事を利用してのカトリック教会の巻返しであった。しかし教会のフレデモ側に立った「汚い戦争」への関与は逆効果であったし、のちのちまで教会の信頼感に傷をつけることになった。

軍部の側でも反フジモリの動きがあった。陸軍ではモラレス元大統領が雑誌で、ペルーにルーツをもたない人間がペルーの国旗や制度を体現し統帥権を掌握することへの不安と疑いを表明し、軍人がそうした大統領に素直に服することができると懸念を露にしたのである。それは先にあげた感情論に等しいものであり、ボログネシやグラウといったペルー軍部が最も崇拜している英雄たちが、実は父親が外国生まれの二世であったという事実と矛盾するものだった。やはり白人の血を引かず、まして混血でもないというのが最大のネックであったろう。白人優



位が今日でも維持されている海軍では、パニソ司令官自体がフレデモ支持の言動をとった。フジモリもこの動きには神経を尖らし、二次選挙前に軍の役割を評価する異例の表明を行った。多数派の民衆の支持に支えられた政権ができることは、本来軍にとっては望むべきであったはずであるが。

「フジモリ降ろし」は、執拗で陰険だった。ガルシア政権とのつながり、脱税容疑、国立農科大時代の黒い噂、政策や人材の不在など、マスコミを通じフジモリを連日追いつめた。一次選直前とはうって変わって、マスメディアのほとんどが反フジモリだった。テレビは九チャンネル、新聞は左翼大衆紙の『ラ・レプブリカ』とアラ系紙が好意的に取り上げた。ただだった。この時点では、世論調査にも



選挙勝利後、支持者に祝福されるフジモリ  
(Página Libre 紙、1990年6月11日)

明らかに作爲が加えられたとみてよい。新聞もリヨサの巻返し傾向がみえるものを選別して報道するようになった。フジモリはこうした動きをうまくかわし、挑発にのらず、逆に支持を誘導していく。むしろ大権力によるフジモリ叩きは、弱いものいじめと映り、同情票の拡大となった。貧しい民衆層は、自分たちの候補者を発見したといってよく、フジモリ支持をいっそう固いものとしていく。

政策と人材不在の批判に対し、急ごしらえで政策チームがつくられた。フジモリ率いる「七人のサムライ」がそれで、サンティアゴ・ロカ(ESAN教授)、アドルフ・フィゲロア(カトリカ大教授)など左翼に近い政党色の薄いエコノミストが動員された。フジモリは経済が破綻した状況の下ではフレデモ側の「ショック療法」を社会や民衆は耐えきれないと反対を表明した。フジモリは勝つことに専念したのである。国民協調を最後まで唱えていたのも同じであった。

二次選の運動を始めるにあたりリヨサは、ネクタイをとり、民衆を向いたスタイルに変更した。この段階から社会支援の公約を実施するといって、缶乳、小麦粉、ヌードルなど基本食料を詰め込んだPAS(社会支援計画)とフレデモと書かれた袋をバリアダス住民に配って遊説を行なった。しかしフジモリが貧民街に入って、自然なパフォーマンスで民衆のなかにとけ込んでいくのとは比べると、物量はあったとしてもリヨサのそれは違和感があり、ぎこちない寂し

いものだった。住民たちはフレデモ側の食料を受け取りながら、フジモリ支持を固めていったのである。

フジモリは大権力、支配権力に対抗する民衆の味方というイメージをうまく誘導した。「みんなと同じ大統領」というスローガンも、民衆と同じレベルの候補者ということを印象づけた。一度行なわれた公開討論では、その知名度からペルーで呼び慣わされていた「ドクトール バルガス・リヨサ」ではなく、「セニョール バルガス」(バルガスさん)と終始呼び続けた。これは白人支配層の伝統を受け継ぐ高名な作家を、自分や庶民と同じレベルまで引き降ろして勝負しようとする演出だった。そして珍しく感情をあらわにして「汚い戦争」を非難したのである。